

→ 柴崎友香の“この町の今は”を歩く

2016.2.12 (日) カルチャーウォーキング

関西文学散歩・第 519 回 参加報告

日本列島を襲った大寒波は、これでもか、これでもかと続いている。早朝の大阪の最低気温はマイナスを記録し、天気予報は「日中の気温は 6 度くらい」と告げた。今日は、関西文学散歩で大阪出身の作家・柴崎友香ゆかりの地を歩く日だ。行先は天王寺界限。胸中で「何回も行ってよく知っている庭みたいなところだ。よりによって、こんな寒い日に行かなくても…」、いや「“燈台もと暗し”で知っているのはガイドブック程度、天王寺をより深く知る絶好の機会だ、寒さが何だ、行こう…」と、「行こうか、止めようか」の二つのココロが、綱引きを始める。で、結局、ケセラセラ的トライ精神が判定を下した。

天王寺駅に集合したのは 35 人。この人数は多いのか、少ないのか？ 今日の講師は「待ってました」と大向こうから声のかかりそうな人、関西の文学振興のために精力的に活動されている高橋俊郎氏である。

駅を後に“てんしば”へ。快晴、青空だ。陽の光もまばゆい。春だ！ 天気予報は外れ。

その“てんしば”は、元の天王寺公園で、2015 年にリニューアルされ、いまは入口付近や「芝生養生中」の立ち入り禁止の広場の両側に、レストランやカフェ、ドッグランなどが立ち並ぶ。早速、高橋講師よりこの公園の成り立ちや経緯などを聞いた。

——活動小屋の絵看板がごちゃごちゃと並んだ明るい通を抜けると、道はいきなりずり落ちた暗さで、天王寺公園であった。樹の香が暗がりに光って、瓦斯灯の蒼白いあかりが芝生を濡らしていた。美術館の建物が小高い丘の上にくろぐろと聳え、それが異郷の風景めいて、他吉は婿の新太郎を想った。——1942 年発表の織田作之助の名作『わが町』の主人公、“ベンゲットの他あやん”が娘初枝とこの公園を訪れ、ベンチで初枝の夫新太郎がマニラで死んだことを打ち明ける場面など、詳しい解説は昼前に準備された講演会で話された。

映画化された『わが町』で“他あやん”を演じたのは辰巳柳太郎だったと記憶しているが、本作は、『夫婦善哉』以上にぼくにとって心に響く作品である。1955 年には椎名麟三の『神の道化師』、2013 年発行の辻原登の『冬の旅』でも舞台になった。流転する人生をたどり、ホームレスとなった主人公の話だが、野宿者たむろする公園、近年は公道に「青空カラオケ」と称する露店が並んでいたが、これらを強制撤去し、2015 年から今の姿“てんしば”になった。公園の管理は、近鉄に委ねられている。

その“てんしば”の一角に銅像がある。目に入っても、見入ることなく人々は通り過ぎる。講師の説明で、その像は、大阪市の 6 代目市長池上四郎氏である、と初めて知った。同氏は、近代都市大阪の建設のさきがけとなった方で、都市事業の確立、財政の整理などを推進された。3 期連続で市長を歴任し、7 代目関市長



にバトンタッチをされた。(写真→池上市長銅像前で)

「天王寺動物園と文学」と言えば、すぐに思い浮かぶのが 2006 年に『その街の今は』で、織田作之助賞を受賞した柴崎友香。彼女は 2014 年には『春の庭』で芥川賞も受賞した。1973 年 10 月 20 日、大正区で生まれ、大阪府立市岡高校、大阪府立大学卒業だ。2000 年に『きょうのできごと』(河出書房刊)でデビューしたが、この作品で天王寺動物園は、重要な場面の舞台になっている。



それで、私たちは 11 時過ぎに天王寺動物園に入園。35 人のかくしゃくとした若人(?)たちは、まずは柴崎友香の小説『きょうのできごと』の一場面、白クマの展示舎(檻)の前に居並ぶ。作品の説明を聞いた後 50 分程の自由見学となり、自分の好みの動物を求めて園内へ散って行った。幼き日、親に手を引かれ嬉々として過ごしたあの日。「何十年ぶりかな？」の声とともに

にあの頃の自分を手繰り寄せるために、動物たちとのいつときの交流を求めて。

ぼくはアシカの池の前で、ここかしこに突っ立っている鷺を見つめていた。飼育係が餌を与える時に、あの鷺達がエサを掠め取る一瞬、鷺が「詐欺師」に変貌するその一瞬を、この眼でとらえようと。

再集合の場所へ戻ってきたみなさんは、笑みを浮かべ、動物達のしぐさ、様子を報告しあっていた。童心にかえるとは、このことだろう。満ち足りた一時であった。だが、1915 年に開園した天王寺動物園には、悲しい歴史もあった。戦時中、人気者だったチンパンジーの“リタ”は軍服を着せられ、防毒マスクを被せられた。コンビの“ロイド”は“勝太”と改名させられ、銃剣を持って行進させられ、ともに日本軍の広告塔になった。

本日のテキスト『きょうのできごと』は、2004 年に行定勲監督で映画化され、妻夫木聡、田中麗奈、池脇千鶴らが出演した。本作の登場人物の“かわち”と“ちよ”の二人が白クマ舎の前で会話する場面が描かれているが、裏話として映画の天王寺動物園のシーンは、神戸市の王子動物園で撮影されたようだ。(写真↑天王寺動物園の白クマ)

この作品の文庫本解説で、芥川賞作家の保坂和志が、「小説も映画もテレビドラマも、ただ筋を語ればいいというものではない。作品独自の運動がなければならない。この機敏な動きは導入部分だけでなく、この小説全体で止まることがない。」と絶賛している。だがぼくは、この作品を読んで、「なんじゃい、これが小説か」と違和感を覚えたものだ。以後、小説とは何ぞや、芥川賞とは、直木賞とは、織田作之助賞とは、純文学とは、大衆文学とはなどなど、自問自答を続けていて未だ答えを導き出せないでいる。ノーサイドの笛が鳴ろうというのに……。

動物園を後にして、林芙美子文学碑、黒田門、大阪市立美術館前を経て茶臼山へ。大坂冬の陣では徳川家康本陣、夏の陣では真田幸村本陣の置かれた所だ。標高 26m、大阪 5 低山の一つ茶臼山の登り口に見慣れぬ「大坂の陣 茶臼山史跡碑」が建っていた。沸騰する波形



は「群雄割拠」を、大きな円形は、そこから浮かび上がった「天下泰平の世」を表現しているようだ。これは、大阪市が建てたものでなく、一心寺が企画制作して大阪市に寄贈したものだという。この金の掛かる粋な計らいを、市当局は、どう受け止めているのだろうか。

昼食の後、一心寺研修会館で、高橋講師の講演を聴いた。今日のテーマ・テキストに沿って、文学作品を中心に“天王

寺今昔”をわかり易く解説していただき、天王寺界限の蘊蓄を深めることができた。一心寺で見逃してならないのは、新たに建設された存牟堂(ぞんむどう)に展示されている大坂夏の陣図屏風の複製陶板だ。その中央部に豊臣方の真田幸村隊、毛利勝永隊、大野治房隊に対峙する徳川方の本多忠朝隊、井伊直孝隊、松平忠直隊がいる。迫力ある歴史の一コマが鋭く観る者に迫り、一見に値する。午後 2 時を過ぎてぱらっときた小雨も意に介さず、幸村終焉の地、安居神社へ歩を進める。ここは夏の陣で傷を負った真田幸村が、境内で傷の手当をしていたところ松平忠直隊の一人に槍で突かれ落命したというエピソードが伝わる地だ。昨今、幸村像も建立されこの辺りの人気スポットになっている。(写真→右端に真田幸村像)



天王寺界限を効率的に動き回って歩数も一万歩近くになった。最後に堀越神社。「気力が落ちた時にお詣りするとよく効く」と評判の樹齢 500 年の楠の神木に、丁寧の上に丁寧にお詣りした。(大阪の人は接頭語をつけ、それをくそ丁寧という) 気力だけではなく、体力も思考力も低下しばなしのぼくに、ご神木のご利益は如何に。ひそかにそう思いながら天王寺駅に向かった。見慣れてよく知っていた筈の天王寺界限に、新しい発見と新鮮な驚きがあったよき一日であった。<報告：老家文雄>